

【学位論文審査の要旨】

論文提出者 土倉 英志

論文題目 創作プロセスと創作におけるプランの役割のモデル構築

—相互行為論にもとづく集団創作活動のフィールド研究—

審査委員

主査：心理学 教授 沼崎 誠

副査：心理学 教授 山下 利之

副査：心理学 教授 下川 昭夫

本論文の課題

本論文では、創作活動のプロセスとプランの役割をモデル化することを目指した。

これまで創造性（creativity）は、心理学・認知科学の分野で、さまざまな観点から研究されてきている。重要な研究テーマのひとつに創造のプロセスがある。ただし、創造のプロセスを対象とする先行研究には2つの難点があった。1つは、主として認知プロセス（アイデアの生成）を対象としており、実際の具体物の創造を検討していないこと、もう1つは、日常にみられる協同・集団での創造を検討していないことである。

近年、こうした難点を克服しようとする研究が散見されはじめた。ただし、具体物の創造を検討する研究は、長期にわたるプロセスへの関心をもちあわせていない。また、協同・集団での創造を検討する研究は、回顧的・逸話的なデータに依拠しがちである。創作活動のプロセスを明らかにするには、これらの課題をクリアする必要がある。すなわち、求められるのは、回顧的・逸話的なデータではなく、創作現場に近いデータを扱うこと（リアリティ）、長期にわたるプロセスを視野におさめること（ダイナミクス）、この2点である。

本論文では、創作活動のプロセスとそのプロセスにおけるプランの役割を明らかにし、モデルを構築するために、映画制作のフィールドワークを行った。データ収集と分析にあたっては、解釈的アプローチに依拠し、相互行為論の立場をとった。こうして得た知見にもとづいて、創作活動のプロセスとそのプロセスにおけるプランの役割のモデルを構築した。

さらに、上記の研究・クエスチョンを追及する過程で、依拠した理論的アプローチに関する課題が見出された。そのため、それらの課題についても理論的考察を加えた。

論文の構成

はじめに

第一部 理論編（1）—創造性・創作活動の研究概要

- 1 章 創造性のとらえられ方—創造性研究史
 - 1.1 創造性への関心が高い社会
 - 1.2 創造性研究の歴史は新しい
 - 1.3 創造性はどのようにとらえられていたのか
 - 1.4 特性としての創造性
 - 1.5 プロセスとしての創造性
 - 1.6 創造性とは何なのか—創造性の定義
- 2 章 近年の創造性研究の展開とその問題点
 - 2.1 天才の脱神話化
 - 2.2 芸術研究
 - 2.3 集団・協同による創造性研究
 - 2.4 芸術の創作と科学の発見の違い
 - 2.5 創造のプロセスをとらえることのむずかしさ

第二部 理論編（2）—依拠する理論的視点

- 3 章 社会心理学と相互行為論
 - 3.1 社会心理学の学際性
 - 3.2 2つの社会心理学
 - 3.3 心理学的社会心理学にたいする批判
 - 3.4 実証的アプローチと解釈的アプローチ
 - 3.5 相互行為論
 - 3.6 一次的構成物と二次的構成物
 - 3.7 参加者の志向性
 - 3.8 相互行為とその外部
 - 3.9 3章のまとめ
- 4 章 プランと状況的行為—状況論的アプローチ
 - 4.1 相互行為論と状況論的アプローチ
 - 4.2 心理学的概念の位置づけ
 - 4.3 「古典的プランモデル」と「リソースとしてのプランモデル」
 - 4.4 創作活動におけるプラン
 - 4.5 4章のまとめ
- 5 章 本論のサーチ・クエスチョン
 - 5.1 第一部 理論編のふりかえり
 - 5.2 第二部 理論編のふりかえり
 - 5.3 研究のねらいと手法
 - 5.4 研究対象

- 5.5 モデルの構築
- 5.6 分析アプローチ
- 5.7 本論の目的

第三部 実証研究編

6 章 創作プロセスとプランの役割はどのようなものなのか？—映画撮影のフィールド研究

- 6.1 フィールドの概要
- 6.2 映画撮影において作られているものは何なのか？
- 6.3 映画撮影はどのように展開するのか？（研究1）
- 6.4 映画撮影において、メンバーの相互行為はどのように変化していくのか？（研究2）
- 6.5 映画撮影において、創作対象はどのように変化していくのか？（研究3）
- 6.6 映画撮影を完結させるために必要なことは何か？（研究4）
- 6.7 6章のまとめ

7 章 創作活動に向けて資源はどのように準備されるのか？—映画制作のフィールド研究

- 7.1 創作活動に向けた資源の準備の重要性
- 7.2 フィールドの概要
- 7.3 創作活動に向けて資源はどのように準備されるのか？（研究5）
- 7.4 考察

第四部 中間考察編

8 章 創作プロセスとはいかなるものか？—創作活動のプロセスモデルの構築

- 8.1 本章のねらい
- 8.2 6章の知見のまとめ
- 8.3 7章の知見のまとめ
- 8.4 知見のモデル化
- 8.5 創作活動のプロセスモデル

9 章 創作活動のプロセスモデルの妥当性の検討—科学講座の創作プロセスを対象に

- 9.1 本章のねらい
- 9.2 科学講座の概要
- 9.3 研究方法—データとその限界
- 9.4 科学講座の創作プロセス
- 9.5 科学講座に向けた資源の準備段階
- 9.6 科学講座を創作する段階

9.7 まとめ

補章 科学講座というテーマはどのように構想されたのか？—科学講座の創作の実践研究

補章 1 目的

補章 2 研究アプローチ

補章 3 収集したデータと記述の手続き

補章 4 結果：科学講座というテーマはどのように構想されたのか？

補章 5 考察

第五部 総合考察編

10 章 プランは創作活動においていかなる役割を果たすか？

10.1 創作活動におけるプランの役割

10.2 プランの役割をいかに解釈しうるか？

10.3 創作活動の来歴をみること

10.4 資源の利用の可能性

11 章 相互行為論はいかに歴史を扱いうるか？

11.1 「社会や文化を扱えていない」という批判

11.2 「社会や文化を扱えていない」という批判にたいするスタンス

11.3 本章の目的

11.4 相互行為の外部に素朴にあるもの

11.5 相互行為の歴史への関心とはどのような関心なのか？

11.6 相互行為にどのように歴史を持ち込むことができるのか？

11.7 相互行為の蝶番モデル

11.8 本章のまとめ

12 章 結語 社会的・歴史的に創造的なものはいかにして生まれるか？

12.1 前提 1—本論文の検討対象は P-Creativity であった

12.2 前提 2—P-Creativity と H-Creativity のプロセスに本質的な違いがあるとはいえない

12.3 前提 3—社会的・歴史的な創造性の成り立ち

12.4 本論で明らかになった創造のプロセスからの社会的・歴史的な創造性への示唆

12.5 社会的・歴史的に創造的なものはいかにして生まれるか、は説明できないのか？

12.6 ドメインの持続性を梃子にした歴史的な協働

12.7 反転した世界から

引用文献

おわりに

論文の要旨

第一部 理論編（１）—創造性・創作活動の研究概要

第一部では、創造性に関する先行研究を紹介した。

1章 創造性のとらえられ方—創造性研究史

心理学において創造性がどのようにとらえられてきたのかを概観した。心理学諸派が創造性をとらえてきた視点を概観した上で（1.3節）、創造的と評価される心理特性に焦点をあてた研究（1.4節）、創造のプロセスに焦点をあてた研究（1.5節）を紹介した。創造のプロセスに焦点をあてた研究には2つの限界があった。1つは、もっぱらアイデアの生成を対象としており、生態学的妥当性を欠いた課題をもちいてプロセスの検討を行っていること、もう1つは、もっぱら個人による創造を対象としており、現実の創造がチームで進められたり、コラボレーションしながら展開されたりするのを見落としていることであった。このように従来の創造性研究はそれぞれに限界を抱えていた。

2章 近年の創造性研究の展開とその問題点

従来の研究の限界を超えようとする近年の研究動向を概観した。とくに、生態学的妥当性の低さを克服しようとする芸術研究（2.2節）、創造がいかにして集団・コラボレーションのなかでなされているかに注目した研究（2.3節）を紹介した。しかし、各研究群には一長一短があった。前者の芸術研究は、生態学的妥当性の問題を克服しているものの、長期にわたるプロセスを追跡することができていない。後者の集団・コラボレーション研究は、進行中の創造プロセスにもとづいて議論を展開することがむずかしい。以上のことから、現実にかかる創造のプロセスを十全に明らかにするためには、長期にわたるプロセスを視野におさめること（ダイナミクス）、創作現場に近いデータを扱うこと（リアリティ）、この2点が重要であることが明らかになった。現実の創造のプロセスを明らかにするためには、研究者が、長期にわたり、現場で活動に参加する手法を用いることが必要であることが確認された。

第二部 理論編（２）—依拠する理論的視点

第一部の研究関心を追跡していくにあたり、どのような理論的立場をとるかを論じた。

3章 社会心理学と相互行為論

社会心理学の現状を概観した上で（3.1から3.3節）、創作のプロセスを検討する際に依拠する理論的立場を説明した。心理学および関連領域のアプローチは「実証的アプローチ」と「解釈的アプローチ」に大別することができる（3.4節）。本論文では、解釈的アプローチに依拠する。また、解釈的アプローチを採用するにあたり、相互行為論の立場をとる。相互行為論は、人びとが相互行為を通じて、現象を、どのように達成・構成しているのかをとらえる「視角」であった（3.5節）。相互行為論の立場をとるにあたり、人びとが実践のなかで付与している意味（一次的構成物）と研究者がそこから構成する意味（二次的構

成物)の関連性を高めるために(3.6節),相互行為に参加している人びとの志向性に配慮しながら研究を進めることが有益であることを確認した(3.7節).

4章 プランと状況的行為—状況論的アプローチ

相互行為論を心理学的な事象に適用した状況論的アプローチ(以降,状況論)と,状況論のプラン観について論じた.状況論は,認知や学習といった,従来「頭のなか」で起きているとみなされてきた現象を,人びとが相互行為を通じてどのように達成しているか,という視角から検討する(4.1節,4.2節).その際,人びとがもちいている資源に注目する.状況論が注目してきた資源のひとつにインスクリプション(記述されたもの)があった.インスクリプションのひとつであるプランについては,重要な議論がなされてきた.そこで,状況論におけるプラン観である,「リソースとしてのプランモデル」を,情報処理モデルにおけるプラン観である「プランモデル」と対比的に論じることで,その特徴を整理した(4.3節).こうした議論を踏まえて,創作プロセスを明らかにするうえで,創作のプランが重要であること,それにもかかわらず,従来の研究はそれを適切に取り扱うことができていることを論じた(4.4節).

5章 本論のリサーチ・クエスチョン

第一部と第二部の議論を踏まえて,本論のリサーチ・クエスチョンを整理した.関心を寄せる現象は,創作プロセスと創作プロセスにおけるプランの役割であるが,これらを明らかにすることにとどまらず,それらを理解するための「モデルを構築する」ことを目的とすることを論じた.本論文では,人びとが協同で行っている創作活動を対象として,解釈アプローチに依拠し,相互行為論の立場から,フィールド研究を実施する.これにより,創作プロセスをモデル化すること,創作プロセスにおけるプランの役割をモデル化することを目的とした.

第三部 実証研究編

映画制作という集団でなされる創作活動を対象として実施したフィールドワークの研究成果を報告した.フィールドワークで得たデータにもとづいて,リサーチ・クエスチョンに応える説明枠組みをボトムアップに生成することが目指された.

6章 創作プロセスとプランの役割はどのようなものなのか?—映画撮影のフィールド研究

一連の映画制作のうち,映画撮影という創作活動を取り上げて,「創作プロセスとプランの役割はどのようなものなのか?」という問いを検討した(研究1から研究4).

撮影現場で創作される対象はショットである.創作活動に先だって,絵コンテや脚本といったショットのプランが存在している.ところが,創作活動においてプランは一瞥されるにとどまり,これをもって,プランにいわば“理念”として示されていることを,具体的な資源として“現実”に置き換える,「プランの現実への置換」がなされる.「プランの現実への置換」により,現場に創作活動の「初期値」が現れる.「初期値」を設定すること

で、創作の「現場の構造化：現場のどこでどのようなことが起こるかが可視化される」と「介入可能性の生起：創作に向けて介入できる対象ができる」が生じる。さらにこれをきっかけに、「初期値」にたいして「たえざる課題化と収束」が生じる。「たえざる課題化と収束」は、創作対象にたいして人びとがさまざまに働きかけることからなる（研究1）。

この「たえざる課題化と収束」のプロセスは、「創作者の行為」、そして、創作者が志向している対象、すなわち「志向対象」にそれぞれ焦点をあてることで、より詳細に理解することができた。まず、「創作者の行為」に焦点をあけると、「規範の生成」が生じていることがわかった。創作プロセスにおいて、創作者の行為には数々の規範が設けられていき、創作が展開するにつれてその行為は不自由になっていく（研究2）。つぎに、「志向対象」に焦点をあけると、創作が展開するにつれて、志向対象に、より詳細に働きかけたり、言及したりできるようになること、すなわち「志向対象の分化」が生じていることがわかった（研究3）。つまり、規範の生成による行為の不自由さによって、志向対象が明確と成り、より詳細に働きかけることが可能になることが見いだされた。

創作活動は、こうしたプロセスを通じて展開するものの、対象を創作するだけではじつは創作は十分に達成されえない。それは“創作活動”にとっては欠くことができないものの、“創作対象”それ自身にとっては不必要である「痕跡」が残っているためである。これは建築における足場のようなものである。それが残っていないと、創作をおえることができない。そこで「痕跡を消去する」ことがなされる（研究4）。

7章 創作活動に向けて資源はどのように準備されるのか？—映画制作のフィールド研究

6章で取り上げた“映画撮影”に先立つ“資源の準備のプロセス”に焦点をあてて、「創作活動に向けて資源はどのように準備されるのか？」という問いについて検討を行った。それというのも、創作のプランに描かれたことを実現するためには、人材、素材、機材、現場といった様々な資源を準備することが求められるからであり、“創作活動”はこうした資源の準備の果てとしてなされているためである。

資源を準備するプロセスでは、プランは準備すべき資源を探索するための材料として、また、多様な資源群から特定の資源を選択する基準としてもちいられる。こうしてプランのまわりに、創作活動でもちいられる資源が結びつけられていく。さらに、プランに結びついた資源が、別の資源をプランに結びつけていく。つまり、資源を媒介とした資源の準備がなされる。また、資源の準備プロセスでは、プランをもちいて資源を選択するだけでなく、準備された資源によってプランが作り変えられることがある。こうした過程を「プランと資源の相互構成」と呼ぶことができる。このプロセスを通じて、資源はプランを媒介としてネットワーク上につながっていく。これによりプランと資源が混然一体となった「プランをハブとする資源のネットワーク」が作られることを明確にした（研究5）。

第四部 中間考察編

第三部で得た知見を踏まえて、創作プロセスとプランの役割のモデルの構築と検証を行

った。

8章 創作プロセスとはいかなるものか？—創作活動のプロセスモデルの構築

創作プロセスと創作プロセスにおけるプランの役割を、モデルとして構築することを目的とした。モデルにはその構造的特徴として、対象に関する3つの項目（「相互行為」「資源」「プラン」）、時間的区分に関する2つの項目（「創作活動に向けた準備」「創作活動」）の枠組みが設けられた。この構造的特徴を踏まえて、「創作活動に向けた準備」については「プランをハブとする資源のネットワーク」「プランと資源の相互構成」、「創作活動」については「プランの現実への置換」「たえざる課題化と収束」「規範の生成」「志向対象の分化」という特徴について、それぞれ「相互行為」「資源」「プラン」という対象に関する3項目の関係性と状態に焦点をあてて整理した。これにより、創作活動が時系列的に展開される様子を理解するモデルを構築した。これを「創作活動のプロセスモデル」と名付けた。

9章 創作活動のプロセスモデルの妥当性の検討—科学講座の創作プロセスを対象に

8章で構築したモデルを、“科学講座の創作活動”に適用して解釈することで、モデルの検証を行った。これにより、モデルの有効性が確認されるとともに、再考する余地のある課題（矛盾）も見出された。これについては10章で議論を行うこととした。

第五部 総合考察編

本論で依拠した理論的立場を再考すること、創造性研究への貢献を総括することを目的に、3つのテーマについて考察を行った。

10章 プランは創作活動においていかなる役割を果たすか？

「プランは創作活動においていかなる役割を果たすか？」という問いについて検討した。本論で構築された「創作活動のプロセスモデル」によれば、「たえざる課題化と収束」においては“プランの役割は限定的である”と考えられた。しかし、9章で科学講座の創作活動にこのモデルを適用したところ、“プランの役割は限定的であるとはいえない”と考えられた。つまり、矛盾が見いだされた。そこで、“プランの役割をいかに解釈しうるか？”という問いが立ち上がった。この問いに答えるために、「相互行為」でもちいられる「資源」が、「プラン」から“制約を貸与された”契機に注目した。「たえざる課題化と収束」の対象となる初期値（＝「資源」）に、「プラン」から制約が貸与された場合には、「プラン」自体は創作活動において参照されない（＝映画撮影という創作活動の場合）。一方で、「プラン」自体から制約が貸与されなかった場合には、「プラン」は創作活動においても参照される（＝科学講座の創作活動の場合）。このように解釈できることが明らかになった。しかし、こうした議論は、本論が依拠してきた理論的立場に反する部分があることもあわせて明らかになった。これについては11章で論じる。

11章 相互行為論はいかに歴史を扱いうるか？

本論で依拠した理論的立場を再考すべく、「相互行為論はいかに歴史を扱いうるか？」という問いを検討した。長期におよぶ創造のプロセスを明らかにするためには、相互行為論

のように、“行為者の志向が向いていること”だけでなく、“〈いま・ここ〉では志向が向いていないものの、かつて志向が向いた結果として〈いま・ここ〉に在るもの”（＝相互行為の歴史）をも取り扱うことが求められることがある。そこで、相互行為論にとどまりつつ、「相互行為の歴史」をどのように扱うことができるかを考察した。

その結果、2つの相互行為場面をまたいで存在する「資源」と「研究者」を、2つの相互行為場面をつなぐ蝶番として、記述に限定を設けることで、無節操に超越的な視点をとったり（＝超越的視点モデル）、視点を偏在させたりする（＝視点の遍在モデル）ことなく、「相互行為の歴史」を取り扱いうることを論じた。この理論的視点を「相互行為の蝶番モデル」と名付けた。

12章 社会的・歴史的に創造的なものはいかにして生まれるか？

最後に、ふたたび創造性をテーマに、本論文が創造性研究に果たした貢献を論じた。「社会的・歴史的に創造的なものはいかにして生まれるか？」という問いについて、まずは、「創造者の視点」から、社会的・歴史的に創造的なものを生むためにどのような方略をとりうるのかを、これまでの本論の議論に即して整理した。

つぎに、創作対象に用いられる諸資源、さらにはそれを包含する「ドメインの視点」から上記の問いを検討した。「ドメインの視点」に立てば、社会的・歴史的に創造的なものは、長期にわたって持続するドメインが、短命な人びとに自身を媒介させ、創造に向けて奉仕させることで果たされるという見方をとりうることで、この見方をとることで従来とは異なる創造性研究が拓かれる可能性があることを論じ、今後の研究の方向性について示した。

【審査結果】

本論文は、相互行為論の立場からの創作活動の現場でのフィールドワークによって、プランの役割を中心に新しいものが創られていくプロセスについて詳細に検討し、創作活動におけるプランの役割・創造性が発現する現場での相互行為・相互行為論の方法論などを丁寧に考察した意欲的な論文である。

これまでの創造性研究の先行研究で明らかになった点、および、取り残されている点を整理し、その点を明らかにするために相互行為論の立場を取ってフィールドワークを行い、創造性が発現する創作現場でダイナミックに生じているプロセスを綿密に検討した点がまず評価できるが、本論文の成果は以下のように要約できる。

- ①映画制作現場のフィールドワークを相互行為論の立場から分析を行い、創作活動が時系列的に展開される様子を理解するモデルを構築し、このモデルが他の創作活動にも適用可能であることを示した。
- ②創作活動におけるプランの役割について、「相互行為」でもちいられる「資源」が、

「プラン」から“制約を貸与された”資源であることを明らかにした。

- ③「資源」の観点から創造性の発現が扱える可能性や、今ここを扱う相互行為アプローチが歴史を扱える可能性について、1つの方向性を示した。

以上のような成果をもたらした論文ではあるが、公開審査においては、いくつかの問題点と課題点が指摘された。

- ①創造性が発現する創作現場を扱って検討しているもの、提示されているデータにおいては創造性が発現する経緯が必ずしも明確ではなく、創造性に関しては思弁にとどまっており、創造性研究の視点で見ると不満が残る。
- ②論文において「資源」という用語が、章によって異なった含意を持つ用語として使われており、この点について用語の使い分けなど明確すべきであった。
- ③複数の人が関わる創作のモデルとしては評価できるものの、このモデルが、より個人的な創作活動に対して適用可能かについては疑問が残り、より個人的な創作活動にも適用可能であることを示して欲しかった。
- ④相互行為論に基づいて歴史を持った活動を研究することに関して11章で論考しているが、現実のデータを分析しているわけではなく、この点についてはデータを示していない点で不満が残る。

このような未解決な問題や課題点があるものの、本論文は博士論文として十分な内容と水準を持つものである。2017年4月27日に行われた公開審査における質疑応答でも、著者である土倉英志が優れた見識と旺盛な研究意欲を有し、指摘された問題点や課題点に関して本人自身が自覚し、今後研究を発展させていく意志と十分な能力を有していることを示すものであった。よって審査者一同は一致して土倉英志に博士（心理学）の学位を授与することが適当であると判断した。